

Hermes Courier

小樽商科大学 広報誌

2007.11

第18号

ヘルメス・クーリエ



小樽駅前第一ビル内ユーザービリティ・ラボの外観



ユーザービリティ・ラボの内部。2つの実験室の様子を観察し、行動データを記録することが可能（詳しくは6ページをご覧ください。）



商大ビアパーティー

特集：発信する商大生

学生による小樽への提言	1
商大生市議が語る議員生活 対談 / 山口和佐 × 成田祐樹	3
室蘭工業大学・北海道薬科大学と 連携協力協定を締結	5
創立百周年記念 オリジナル切手シート発行	5
シリーズ先生紹介 第14回 平沢 尚毅 准教授	6
INFORMATION	7



特集

発信する 商大生

- 学生による小樽への提言 -

実学を重視する小樽商大にとり、究極の学問現場は実社会そのものです。本誌は、以前から「商大生頑張ってます」と銘打ち、学校の枠を飛び越えた学生たちの様々な活動を紹介して参りました。

今回は更に、学生たちの地域貢献を特集に取り上げます。前半では小樽の文化、観光、そして景観問題について活発に提言する商大生たちのゼミやグループの活動を紹介し、後半では今春誕生した「現役商大生市議」の対談の様子をお伝えします。



小樽市観光ポスター

小樽の芸術・文化振興について

小樽芸術文化ルネッサンス研究会
大学院商学研究科アントレプレナーシップ専攻 北川 泰治郎

小樽商大ビジネススクールに入学し、1年半が経ちました。社会人から再び商大生に戻り、知らなかった小樽を感じるようになりました。

実は今年の3月、ビジネススクールの1年目が終わり、ほっとしていたところ、商大の大先輩である佐野力さんから市立小樽美術館のプロモーションプランのお話をいただきました。美術館とは縁遠い私にとって、やや戸惑いがありましたが、学んだビジネスプランニングを試す良い機会だと思い、ビジネススクールの有志と小樽芸術文化ルネッサンス研究会を結成し、取り組むことにしました。

我々がプロモーションプランを作成する対象となったのは森本三郎・光子夫妻の特別展でした。風景画、特に冬の

小樽を描く三郎さんに対して光子さんは人物画。私にとっては対照的に感じたご夫妻でした。その後、ご夫妻の世界に入り込んでいったからでしょうか、プランは実行されなければ意味が無いと

いうことで、この特



(上) 森本三郎・光子作品集
(下) ポストカード

別展のプロモーションの実行まで携わりました。ポスター・チラシを製作し、バスや列車内に掲出し

たり、新聞やラジオで宣伝もしました。幸い、多くの企業が好意的に協力してくれましたので、とても感謝しています。さらに図録やポストカードを美術館で販売することで、多くの方にご夫妻の絵を知ってもらい、ファンを増やすことを目指しました。こちら購入される方が予想以上に多く、大成功だったと思っています。

プロモーションを実行していく中で、小樽の芸術家を知ってもらえば、多くの方が関心を持ってくれると思いました。芸術に触れる機会をくれてありがとうと、感謝のお言葉も頂戴しました。きっと絵を通して昔の小樽を眺め、画家の人生を知ること、絵や自分自身と対話することができる、これこそ芸術のすばらしさなのかなと思いました。

今、ビジネススクールで学ぶ私が、森本三郎・光子展を終え、違った視点で小樽をみると、小樽は商業だけではなく、美術、文芸、音楽、演劇など多くの芸術が生まれた土地なのだと感じます。また小樽には長い歴史があり、たくさんの方々の思い出がある街だと思います。このすばらしい目に見えない資産が、小樽市民と共に商大によってさらに輝き、いつまでも生き続けることを願っています。



研究会ミーティングの様子(右から二人目が筆者)

宿泊型観光について

中小企業論 田中幹大ゼミ
商学科3年 松浦 良司

僕たち田中ゼミ生は、ゼミ活動の一つとして「小樽の観光と宿泊業」をテーマに、市内のホテルや旅館にヒアリング調査を行ってきました。小樽は、周遊型観光地になっていると言われており、観光に来る人（入込客数）は、年間約750万人であるのに対し、宿泊者数は年間約70万人と大きな開きがあります。これには、札幌に近いという立地条件や小樽の観光資源が限られているなど様々な要因が考えられますが、小樽の宿泊業者は、このような現状や宿泊者数を増やす戦略をどのように考えているのか、僕たちはホテルや旅館を訪問して話を聞いてまわりました。実際、ヒアリング調査をして、それぞれの宿泊業者は、多くの努力や工夫をしていることがよくわかりました。その一方で、個々の宿泊業者の取り組みだけでは不十分で、小樽地域全体で取り組まなければいけないこともあるとわかりました。調査で小樽宿泊業者の生の声を聞いたことは、僕たちにとって、とても良い経験になりました。

僕たちは、調べたことをもとに地域再生システム論（5ページ上段参照）に参加したり、一日教授会（7ページ下段左



一日教授会での発表の様子
（右端が筆者）

参照）で報告させてもらいました。公の場で発表して、様々な意見をもらったことは、大変ためになりました。いただいた意見をもとに今後も勉強していこうと思います。

今回、調査に協力していただいた宿泊業者の方々には、とても感謝しています。本当にありがとうございました。

小樽の景観行政について ～一橋大学との合同ゼミの報告～

行政法・公共政策 今本啓介ゼミ
企業法学科3年 国原 健司



一橋大学との合同ゼミの様子
（右から三人目が筆者）

われわれ今本ゼミ3年生一同は、9月13日に一橋大学の薄井一成ゼミナールと代々木オリンピックセンターで合同ゼミを行いました。このゼミで、私たちは「小樽の景観問題」について研究し、小樽市の歴史的景観の現状や、景観保護に対する市の政策について報告することにしました。

まず、小樽市における景観問題の歴史、特に、小樽運河保存を巡る論争について調べ、その論争が与えた変化を明らかにしました。次に、小樽市の景観条例を調べ、景観に

対する市の政策について、そして、将来に向けた景観保護計画についての理解を深めることにより、問題点を指摘し、その改善策を検討しました。さらに、それを他都市と比較することにより、小樽市が劣っている点を明らかにし、小樽市が参考にすべき点を検討しました。ここでは特に、最先端の景観政策を行う京都と、一橋大学のある国立市を比較の対象としました。しかし、小樽市ではこれらの都市にはない、人口減少という問題を抱えています。小樽市が観光都市として成長していくためには景観を維持する必要がありますが、それは人口増加を促進することと相反する関係にあります。それを解決するためには、市と住民が互いに理解し合い、景観に対する意識を高めたまちづくりをする必要があると思います。

以上のような研究を一橋大学との合同ゼミで報告しました。国立市においても景観が問題視されているためか、一橋大学の方々はとても興味深く報告を聞いておられ、非常に充実した時を過ごすことができました。今回の研究を機に、商大生として今後とも小樽市の景観政策の動向に注目していきたいと思っています。

小樽商大には、学生と地方議会の議員の二足のわらじを履く学生議員が2名います。今回、本号で「発信する商大生」を特集するにあたり、自治体に直接発信している代表格である商大生市議の対談を企画しました。

なぜ議員を目指したか

今本(司会): このたびは、議会の会期中でお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。早速ですが、まず、学生でありながら議員を目指された理由を聞かせてください。

成田: 僕は学生だから出馬しようと思ったことはありません。ただ、学生が出るとなれば、商大というのは小樽に根付いている学校で、自分の個性を出せるかなと思ったこと、そして、学生であるにもかかわらず、小樽の財政や状況に対してテコ入れしなければ非常にまずいと思っていたことから出馬しようと思いました。

今本: 成田さんは出馬の際、地盤はあったのですか？

成田: 全くなにもなしです。出身も札幌ですし。選挙に出るために住民票を移しましたし、親戚が多いわけでもなく、商大という部分しかアピールできることはありませんでした。

今本: 山口さんが議員を目指した理由は何ですか？

山口: きっかけは、議員インターンシップです。議員のところで2ヶ月間勉強するというものでした。それまで政治に興味があったわけではなかったのですが、普段政治家に会うこともないし、自分では「政治家って本当はどうなのかな？」という部分もありましたので、いい機会だからやってみよう。私は働いてから大学に入ったので、普通の企業インターンシップではなくて議員インターンシップだからこそやってみたいと思いました。

体験して感じたことは「政治家って、けっこう身近だな」と思ったことと、「いろいろと札幌も大変なんだな」ということです。そんなときに、ある政党から「選挙に出ないか」



山口 和佐 (やまぐち・かずさ)

商学部 / 商学科4年
平成19年4月から札幌市議会議員

雇用の問題とか、先生に電話で聞いたたりしてました



対談

札幌市議

小樽市議

山口和佐×成田祐樹 商大生市議が

と声がかかりました。正直、とつても迷いました。政治のことはまったくわかりませんでしたから。それまで、札幌市議の選挙では40数歳で最年少だったのですが、学生で若い私が出ることで、もちろん私が最年少でした。お金もかかるでしょうし、まず従来では当選しなかったのです。でも、私は「やってみようかな」と思いました。こんなチャンスはなかなかないと思って。

選挙運動の時の苦労

今本: 選挙運動の時の苦労話とか教えてください。

山口: 語り尽くせないです。(笑)

成田: 選挙カーがなかったことかな。(笑)

今本: 山口さんは駅前で演説をしたりは？

山口: しましたよ。スーパーの前で。ただ私にはスタッフがいないので、一人でマイクを準備し、演説をしながらピラも配っていました。ほかの人の盛りあがっている姿を見て、寂しい思いをしました。

今本: 誰か友人とか、いなかったですか？

山口: 平日とかはみんな時間がないのです。

成田: 気持ちだけで手伝ってもらうので、なかなか難しいです。みなさん議員で長くやっている人はそれなりに支援者がいますが、私たちのように、何の実績もなく「うからない。落ちる」といわれていた学生には支援がないのです。

学生生活と議員生活の両立の難しさ

今本: 学生生活と議員生活を両立させる難しさはありますか？

山口: 札幌なので学校に来られないです。私は3年間で卒業しようと思っていたので、友人関係がきちんと保てないというか…。選挙の終盤は、学校の友達に本当にたくさん手伝ってもらったので、学校に行けなくなるとそういう人たちに会えないし、「変わったよね」って思われるというか。変わったのではなくて、時間がなくなってしまった。

成田: 前期で単位をとり終えたので、あとは修士論文ですね。この仕事って、ちょっとした変更が多いので、先生とタイミングを合わせるのが大変です。

語る議員生活

山口:でも、学生だからよかった面もあります。例えば雇用の問題とか「この制度はどうなっているのだろう」と思うことを、学校の先生に電話で聞いたりしていました。商大のOBの人たちも手伝ってくれたり応援したりしてくれます。

成田:それはあります。例えば、街の景観について「ほかの都市で取り組んでいるところがありますか?」と聞いたときに、先生は本を貸してくれたりしました。先生に手伝ってくれないかなーとか思ったりして。

山口:そうそう、いろんな繋がりをお持ちだから「こういう人がいるから行ってみなさい」と紹介状を書いてくれたり。

成田:学生だとあまり政治色が無いというか、中立的なイメージがするという事はあります。話しやすいとかね。これが、学校を卒業したらまたどうなるかわかりませんけれど。

商大生市議から見た小樽・札幌の課題

今本:みなさんから見た、小樽・札幌の課題はありますか?

成田:既存のものに頼り過ぎているということです。例えば景観です。観光的にも運河ばかりがクローズアップされていて、それで市全体が潤うわけではない。忍路や蘭島など夕焼けがとてもきれいだとか、小樽には、ほかにもっとよいところがあって、市民にとっては当たり前過ぎる美しい景色があるわけです。ガイドブックにはのっていないよさを掘り起こしていない。観光も数字的には停滞しているのです。考え方を転換しないと、観光すら落ち込むのではないかと。

今本:もっと自発的に市民が地区計画を作ったりする動きがあればいいのですが、議員に頼んだほうがずっと早い、と考える人が多過ぎる。

成田:昔型の議員さんに多いですね。いかに自分たちの町の要望を聞かすという。人口も少なくなっていて、状況も変わっています。予算は減っているし、市の公共施設も減らす、既存のサービスも減らすという状況です。だから、要望に応えよう応えようとすると、逆に議員は恨みをかけてしまいます。小樽は縮小していくから、何を取り入れていくかが難しいです。

今本:札幌市の課題は何ですか?

山口:札幌って「行ってみたい街ナンバーワン」なんですよ



司会
今本 啓介
(いまもと・けいすけ)
商学部企業法学科准教授
(行政法・租税法)

ね。行ってみたいと思われていて、観光客が年間1,400万人訪れているのですが、じゃあリピーター率ってどうかかと、議員になってから考えました。観光客にアピールするためには、市民みんなが観光客に対してやさしくなって、それぞれがモチベーションを高く持ち、観光客に「また、札幌へ来てみたいわ」と思ってもらえるようにしなくては行けないと、議員になってそう思うようになりました。札幌だけではなく、小樽にも30分で行けますから、もっと小樽とも連携してやっていければ理想ですね。

成田:国政の話になりますが、地方切り捨てになっているなとは思いますが。平成の大合併とかありましたが、国の方針が地方軽視になっているので、そういうことがこれからも多くなると思います。

<対談を終えて>

市議の生活にはまだ慣れないところもあるようですが、若さと持ち前の元気さで乗り切ってくれるのではないかと思います。そして、ぜひ商大で培った「実学」を駆使して、議会に新風を吹き込んでほしいものです。最後になりましたが、お忙しいところ時間を取っていただきありがとうございました。(今本)

先生と時間的タイミングを合わせるのが大変です



成田 祐樹 (なりた・ゆうき)

大学院商学研究科現代商学専攻 / 応用社会情報コース2年
平成19年4月から小樽市議会議員

室蘭工業大学・北海道薬科大学と 連携協力協定を締結

小樽商大は、室蘭工業大学と北海道薬科大学との間でそれぞれ包括的な連携協力協定を締結しました。大学間の連携協力協定は、平成17年10月に、文理融合による連携協力として札幌医科大学、北海道東海大学との間で締結したことに続くもので、今回で4大学目となりました。タイプの異なる大学との協定締結は、お互いの特色を活かし、連携して人材育成、研究交流、生涯教育等を行うことにより双方の大学並びに地域社会の発展に資することを目的としています。

室蘭工業大学との連携事業の一つとして、9月20日（木）から27日（木）までの8日間にわたり「地域再生システム論」を開講しました。この講義は、両大学の学生をはじめ、この分野に関係のある地方自治体、企業、NPO法人、一般市民も参加し、3連休をはさんだ講義日程にもかかわらず、約130名が受講しました。観光・ブランド・環境を三本の柱として、小樽・室蘭が抱える問題点等について、内閣府、室蘭工業大学、本学等の講師による講義が行われ、最終日には、15チームに分けられた学生により、具体的な小樽の活性化策が各チームから発表されました。

また、北海道薬科大学との連携事業としては、10月13日（土）と20日（土）に合同市民講座「健康に

室工大と連携して行われた「地域再生システム論」の講義風景



室蘭工業大学調印式
(前列右が秋山学長、
左が松岡室工大学長)



小樽商科大学・北海道薬科大学
連携協力に関する協定書調印式



北海道薬科大学との調印式で握手する秋山学長（右）と
大和田北海道薬科大学学長

生きていくために」を小樽商大駅前プラザ「ゆめぼーと」において開催し、両大学の教授がそれぞれ講演を行いました。

今後もそれぞれの大学の特性を活かした様々な連携事業の実施に取り組んでいくこととなります。



創立100周年記念 オリジナル切手シート発行

小樽商大は、4年後の2011（平成23）年創立百周年を迎えます。この記念すべき百周年を在学生、教職員はもとより、卒業生や地域の方々に広く周知して、共に祝うために、オリジナル切手シートを発行することになりました。

上半分に中村善策画「緑丘回想」を配したこの切手シートは、小林多喜二・伊藤整、高商時代の校舎や授業風景、現在のキャンパス等の写真や絵をモチーフにした切手で構成されており、商大百年の歴史を物語る内容となっています。

同窓会である緑丘会各支部や小樽商大大学生協で、平成20年1月頃から1シート1,500円で販売する予定ですので詳しくは商大総務課総務係へお問い合わせ下さい。

TEL.0134-27-5206 FAX.0134-27-5213
E-mail shomu@office.otaru-uc.ac.jp



ひら さわ なお たけ
平沢 尚毅

社会情報学科・人間工学、情報システム学、
ユーザビリティ工学

1987年3月 早稲田大学情報科学教育センター助手
1990年3月 早稲田大学大学院理工学研究科
博士課程単位取得満期退学
1990年4月 小樽商科大学助手
(1996年-1997年 英国HUSAT研究所 客員研究員)
2002年4月より 小樽商科大学助教授(現在准教授)

革期を迎えており、この機械製品と電子部品のものづくりの融合が緊急の課題なのです。世界規模の競争が激化している中で、これをクリアしていかないと次の日本はない、というくらい重要な問題です。わたしたちは「ユーザーエクスペリエンス・イノベーション」という観点からその問題に取り組んでいます。それは機器を扱うときの間違った操作やとまどいに着目し、それをヒントに新製品を開発するというように、ユーザーが無意識的に行っている「体験」からイノベーションを作り出すということです。現在はこうした考えを実現するための設計方法の開発や、事業を運営する組織をどう作るかといった研究をさまざまな企業との共同で進めています。まだ解答の見えない問題ですが、これを明らかにしていくのがこの実験室の使命だと考えています。

最後に商大生に一言いただけますか。

平沢：大学院に行こう！です。大学院に行かないと専門的な知識やスキルは得られないので、ぜひぜひ大学院を目指して勉強してほしいと思います。

ユーザビリティを通して 「ものづくり」の未来を考えています

平沢先生は商大で最もつかまえにくい先生の一人です。大学の仕事に加え、「ビジネス創造センターユーザーエクスペリエンス研究部門」の部門長として、さまざまな企業との打ち合わせや多くの研究スタッフのコーディネートに日夜、走り回っているためです。今回は授業と出張の合間に運良くつかまえることができ、駅前に設立された「小樽商大ユーザビリティ・ラボ」でお話をうかがうことができました。お話を聞くなかで感じたのは、先生の多忙な日々を支えているのが、日本のものづくりの危機に対する使命感なのだという事です。

洗練された印象の実験室ですね。こちらではどのような実験をしているのですか。

平沢：ユーザビリティというのはもともと「使いやすさ」のことですが、現在ではそうした面を考慮しながら製品の企画開発やデザインを行うことを意味します。実験室は2つあり、一つは会議室風、もう一つは家庭のリビング風になっています。そこで掃除機を使ってもらったり、ウェブサイトの閲覧してもらったりして、データを収集します。それを分析することによって、通常の開発プロセスでは発見しにくい問題をチェックすることができるのです。

この施設が設立された経緯について教えてください。

平沢：そもそも国が全国に拠点をつくって開始した知的クラスター創成という事業があって、北海道でも『札幌ITカロッツェリア構想』が立ち上がりました。これは産学官が連携して、組み込み型ソフトウェア(携帯電話等の電子部品に内蔵されているソフトウェア)を迅速に開発し、デザインとユーザビリティを評価できる仕組みを作り上げるというものでした。

私はもともと評価委員として関わっていたのですが、コメントをしているうちに、ユーザビリティの専門家として深く関わるようになりました。何をやったかという、開発現場のマネジメントを担っている方に参加してもらって、産業界に必要なユーザビリティのツールを開発するという事です。このときに商大の敷地内に最初のユーザビリティ・ラボが作られました。そして、スタッフとして日本中のエキスパートを集め、ユーザビリティに基づいた設計や評価を可能にする仕組みを作りだしました。また、NPO法人を立ち上げて企業向けにセミナーを行うなど、集積した知識を産業界に活かす試みも行いました。

この事業は3月で成功裏に終了したのですが、一連の研究をさらに発展させるため、昨年、大学として概算要求を行い、3年間

の研究推進枠での予算が認められました。この小樽駅前のラボの設立・運営はこの予算によるものです。

文系大学にこうした大型予算が認められるというのは非常に珍しいと聞きますが...

平沢：文部科学省に3回出向いて説明したのですが、確かになかなか難しそうだった。でも、ある一言が効果的だったようです。それは「なぜ日本ではアイポッドが作れなかったのか」。

それはどういうことですか。

平沢：ニーズを調査して製品を企画するという従来の方法論では、ITのイノベーションは生まれにくいということです。それを痛感したのはイギリスで人間中心設計というアイデアに触れたときでした。私は人間工学の方法論を持っていったのですが、先端の研究者達の考え方は全く異なり、話が通じないのです。ショックでしたが、これは大きな変革があると感じ、懸命に吸収しました。それが大きな転機でしたね。

その考えというのは、ものづくりの「上流」にユーザビリティの発想を位置づけ、それに基づいてデザインやソフトウェア開発を一元的に進めていくということです。たとえば、同じものづくりでも自動車と電子部品とでは水と油のように異なります。自動車の場合はエンジンやステアリングといった部品を組み上げて作るわけで、部品一つ一つの品質が大切になるのですが、電子部品の場合には、最終製品をイメージしながら全体を俯瞰し、そこから細かいところを煮詰めていくことが大事なのです。

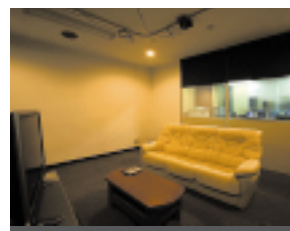
実は現在、日本のものづくりは大きな変



研究の打ち合わせ等を行う
ミーティングスペース



実験室1(会議室風)



実験室2(リビングルーム風)

INFORMATION

平成20年度入学試験日程のお知らせ

商学部(昼間コース・夜間主コース)

選抜区分	コース	出願期間	選抜期日	合格発表
推薦入学	夜間主	19.11.1(木) ~11.8(木) 終了	19.11.17(土) 終了	19.11.29(木) 終了
社会人特別選抜				
推薦入学	昼間	20.1.17(木) ~1.24(木)	センター試験と書類審査 20.2.13(水)	20.2.8(金) 20.2.21(木)
帰国子女・中国引揚者等子女・ 私費留学生特別選抜				
専門高校・総合学科卒業生選抜	昼間	20.1.28(月) ~2.6(水)	20.2.25(月)	20.3.6(木)
一般選抜(前期日程)	昼間・夜間主			
一般選抜(後期日程)	昼間		センター試験と書類審査	20.3.21(金)

今年度から東京にも試験場を設置します。

大学院商学研究科(アントレプレナーシップ専攻・現代商学専攻)

選抜区分	出願期間	選抜期日	合格発表
アントレプレナーシップ専攻(組織推薦)	19.11.15(木) ~11.29(木) 終了	19.12.16(日)	19.12.20(木)
アントレプレナーシップ専攻	19.12.25(火) ~20.1.15(火)	20.2.3(日)	20.2.15(金)
現代商学専攻 【博士前期課程】【博士後期課程】	19.12.25(火) ~20.1.10(木)	20.2.2(土) ~20.2.3(日)	20.2.15(金)

学生募集要項の請求方法など

入学試験に関するお問い合わせは、次の担当までお願いします。

入試課入学試験係

TEL : 0134-27-5254

E-mail : nyushi@office.otaru-uc.ac.jp

商学部入学試験に関する情報 : <http://www.otaru-uc.ac.jp/hnyu1/>

アントレプレナーシップ専攻に関する情報

: <http://www.otaru-uc.ac.jp/master/bs/index.htm>

現代商学専攻に関する情報 : <http://www.otaru-uc.ac.jp/master/gs/gs.html>

第6回「一日教授会」を開催

平成19年10月26日(金) 小樽グランドホテルにおいて、市民の方々との意見交換会「一日教授会」が開催されました。

第6回を迎える今回は「商大生の主張～小樽をもっと盛り上げよう!～」をテーマに、地域活性化について意見交換を行い、会場には一般市民、学生・教職員合わせて約150名の参加がありました。

第1部では、学長から本学の地域貢献の取り組み等について報告があった後、本学学生3組が地域に根ざした活動の報告を行いました。

続く第2部では、学生による発表や本学の地域貢献活動全般についてフロア全体で意見交換を行いました。市民からは「商大生らしく経営分析・統計分析も盛り込んでどうか」「ゆめぼーとの設備を充実させて欲しい」等の意見・要望があり、大変有意義な時間となりました。

ご参加頂いた市民のみならず、ありがとうございました。

なお、この会の発言内容や市民から寄せられた意見、感想等はホームページに掲載しています。

URL <http://www.otaru-uc.ac.jp/hsyomu1/ichinichi/dai-6.htm>



商大ビアパーティーを開催

平成19年8月9日(木)、大学会館前でビアパーティーが開催されました。

市民を招いてのビアパーティーは、昨年の一日教授会で要望が出され今回初めて実現したものです。当日は一時小雨が降る、あいにくの天気にもかかわらず、120名を超える来場者がビールを片手に夏の夜を楽しみました。

また、会場では、ジャズ研究会による生演奏が披露され、来場者からアンコールを受けるなど大変好評でした。



100周年横断幕を設置

小樽商大が2011年に創立100周年を迎えるにあたって、地域の皆様にも広く知っていただくために小樽



駅前の歩道橋の駅側に横断幕を設置しました。横断幕は「小樽商大 創立100周年まであと4年」のフレーズと左に学章、右に100周年ロゴ・マークをあしらったデザインとなっています。

機会がありましたら是非一度ご覧ください。

学生や先生の活動、イベント、学内の風景等をブログで毎日好評更新中!



<http://d.hatena.ne.jp/shoudai-kun/>

編集後記

小樽商大のオリジナル切手シート発行は、国立大学法人初の事業ですが、ここまでご協力することができたのも、総務課A君の尽力に負うところが少なくありません。原画のデジタル編集をすべて引き受けてくれた彼は、今やグラフィックデザイナーも顔負けのパソコン画像処理名人となりました。A君どうもありがとう。君の業務用パソコンは遅くて画像編集の際、時々フリーズしかけるけど、それにもめげず、これからも頑張れ!(ま)

編集スタッフ 鈴木将史、杉山 成、今本啓介

【ご意見・ご要望のお願い】

広報委員会では、読者の皆様のご意見・ご要望をもとに、より良い広報誌を作成する所存です。取り上げてほしい話題、質問したいことなど何でも結構です。下記にお寄せください。

E-mail : kouhou@office.otaru-uc.ac.jp FAX : 0134-27-5213

URL <http://www.otaru-uc.ac.jp>